

箱根権現縁起の研究

——『筥根山縁起并序』を中心に——

一、はじめに

本稿は、箱根権現草創の縁起物語のうち、特に『筥根山縁起并序』というテキストを中心に論じるものである。

『筥根山縁起并序』は、霊地・箱根に関する事跡などを、年代順に列挙する内容となっている。本書と同内容のテキストも、他に二点存在する。

しかしながら、「箱根権現縁起」に関するテキストの内、本書と全く異なる言説を有するものがある。『神道集』所収の説話や『箱根権現縁起絵巻』などがそれにあたる。

これらの箱根権現の縁起物語群は話の系統から、箱根の歴史を年代順に列挙している『筥根山縁起并序』のような形式のテキスト群を（A系統）、本地物語を有する『神道集』のような形式のテキスト群を（B系統）として、二種の系統に分類することができる。

箱根権現縁起の本質を理解するためには、両系統を網羅した研

究が不可欠であるが、残念ながら現時点では（B系統）の作品に関連する研究が主流であり、（A系統）に関する考察は限られている。本書には物語的な側面と、歴史的な側面の両方が内包されており、歴史学の側からは荒唐無稽で歴史から乖離されたものと考えられていた影響もあるだろう。

『筥根山縁起并序』についての先行論は、西田長男¹⁾と五来重²⁾のものがある。この両者は、とりわけ箱根山創始者である万巻上人の实在性に着目している。万巻は箱根の他にも鹿島での神宮寺建立や、伊勢国多度神宮寺における丈六阿弥陀佛像造立などの事跡が知られており、関連資料による詳細な分析が行われている。しかし、これらの研究は万巻の存在を裏付けるための考察に終始している感があり、『筥根山縁起并序』というテキストそのものの内容に踏み込んだ検討は行われていないのが現状である。

「箱根」という聖地の由来を語る上で（A系統）（B系統）と、全く異なる説話が存在したということは注目すべき点である。すなわち、この双方を網羅して研究することが「箱根権現縁起」の世界観を理解する為には不可欠である。

大久保 あづみ

そこで本稿では、従来の研究で注目されることの少なかつたA系統の作品、特に『箱根山縁起并序』に焦点に当て、理解を深めることを目的とする。

二、「箱根権現縁起」の系統分類

箱根権現縁起を語る物語のうち、現在確認ができるテキスト群は以下の通り。

〈A系統〉

①『箱根山縁起并序』

a 白文本（写本、一軸、箱根神社蔵、室町時代中期ごろか、元奥書に建久二年（一一九一）とある）

↓箱根神社本の他に、群書類従所収本、国立国会図書館蔵本、国立公文書館内閣文庫蔵本、静嘉堂文庫蔵本がある。

b 訓読本（写本、一軸、箱根神社蔵、寛正五年（一四六四）、

白文本と同内容の元奥書あり）

②『箱根山略縁起』

（箱根神社大系所収、原本なし、形態・年代不明、奥書に「相州小田原侯儒預 樋仰高」とある）

③『相州箱根山畧縁起』

（版本、一冊、箱根神社蔵、江戸時代）

↓他に四国大学凌霄文庫、岩西尾市岩瀬文庫、大洲市立図書館矢野玄道文庫、三康図書館、早稲田大学図書館三康図書館、八戸市図書館小笠原家文書にそれぞれ所蔵さ

れる。

〈B系統〉

④『箱根権現縁起絵巻（箱根神社蔵本）』（二軸、鎌倉時代末期・十四世紀前半ごろ）

⑤『神道集』巻二一七「二所権現事」（南北朝時代（一三三六～一三九二））

⑥『箱根権現縁起絵巻（個人蔵本）』（二軸、山北町・平井節男氏蔵、天正十年（一五八二））

⑦『いづはこねの御本地』（刊本、上中二巻のみ、慶應義塾図書館蔵、寛文年間（一六六一～一六七二））

⑧『箱根本地由来』（写本、一冊、慶應義塾図書館蔵、江戸後期）

ここで特記すべき点は、『箱根山縁起并序』の箱根神社蔵本aのみに、「箱根山神道口訣」なる文書が添付されている点である。これに関しては〈四、「箱根山神道口訣」の存在〉に記すが、A系統諸本とも、B系統諸本とも全く異なる説話を有しており、神社蔵本の独自性として捉え、その存在の意味に注目する必要がある。

三、「箱根山縁起并序」の内容

『箱根山縁起并序』は、「地神より以来、漸く神徳を記す」とされる聖地・箱根山の縁起を語る文書である。成立は鎌倉時代初期まで遡り、奥書の内容から別当行実の請によって信救（大夫房覚明）が著したとされている³。成立年代は、元奥書に建久二年（一

一九一)とある。箱根神社蔵 a本が室町時代中期ごろの写本と考
えられており、現在最も古いと考えられている。⁴⁾

はじめに、古来より仙人が棲む神山として山岳信仰の対象と
なった事跡を語る。その後、中興の祖である万巻上人が箱根三所
権現を当社に奉斎した経緯を記す。延暦二十年(八〇一)に征夷
大将軍坂上田村麻呂が参詣し表矢を献じ、弘仁八年(八一七)に
嵯峨天皇の勅によって駿河・伊豆・相模の三国を社頭と社領とし
て寄進、また鳥羽上皇が酒匂郷(現・小田原市)を寄進したこと
などを記す。本書は箱根権現が顕現する経緯とその後の、鎌倉時
代初期までの歴代の事跡を詳細に記す。

本書の内容として最初に注目すべき点は、神仙たちの時代と、
箱根山第四世・万巻上人の事績についての記述である。本書にお
いて箱根山は、三代の仙人により聖性を持ち始め、四代・万巻上
人が箱根三所権現を感得したと説明される。このように数代の仙
人によって霊山としての姿を持ち始め、とある行者の功德により
神が顕現する、という流れは、伊豆山の縁起である『走湯山縁起』
にも共通する⁶⁾。万巻の実在性に関しては、先行論に詳しい。本
書では幼少期から徳高い人物として描かれ、その死後にも嵯峨天
皇の夢に出現するなどの記載がある。

万巻が箱根三所権現を感得した瑞夢の描写は、以下のように記
される。(私意によって書き下し、句読点を付した。以下同。)

三容各その兒を異にす。比丘形有り…(中略)…また宰官形
あり…(中略)…また婦女形有り…(中略)…万巻夢醒め
ぬ。日数たたずして、かの霊瑞遠く天聴に達し、即ち勅願を
為して梵宮を造る。霊場を飾りて金玉を以つて補す。三容を

一社に崇め奉り、靈廟各箱根三所権現と号す。主賓は五尊有
り。駒形・能善これ左これ右。

この内容によると、箱根権現は五尊である。まず「比丘形・宰
官形・婦女形」とあらわされる「三輩」がすなわち箱根三所権現
であり、それぞれが万巻の修行を通じて現れたという経緯を説明
する。そしてその霊夢により勅が下り、箱根権現三尊を一社に祀
る堂宇が造られる。その際左右に駒形と能善も祀られたことによ
り、五尊となる。

この「駒形」と「能善」の詳細は不明である。『新編相模国風
土記稿』⁸⁾によると、駒形は大磯高麗権現を、能善は熊野権現を
勧請したとあるが、出典が未詳である。しかしながら、「駒形」「能
善」はそれぞれ箱根三所権現を守護する役割を担う権現として存
在していたようであり、『神道集』「二所権現事」にそのような記
載がみられる。¹⁰⁾

また、箱根三所権現の「比丘形・宰官形・婦女形」に関する記
載が資料によって変遷することも留意すべきである。本書では三
所権現の祭神や垂迹に関する記載がないが、『神道集』に代表さ
れる(B系統)の縁起には、「三容(三人)」であり、それらは「法
体・俗体・女体」の形をとる点、またそれぞれの本地は「文殊・
弥勒・観音」である点が記されている。

五来重は箱根を修験の山として考察する上で、この「法体・俗
体・女体」の神の形式は他の修験の山(熊野・高野山・白山など)
にもみられる形と説明した上で、女体は山神、俗体は山神を祀る
託宣者、法体は開祖の法師であるとしている。開山上人の神格化
は、その苦行と呪術の託宣で山神が憑依し、神と一体化するとと

もに一山山伏の偶像となるためである、とする。この内容を鑑みて『宮根山縁起并序』の内容を考えると、万巻に関する記事に以下の内容がある。

弘仁八年十月二十四日、九五の奇夢有り。万巻詫びて云はく、「我これ室利応化、生縁を尽くす。魂を本山に還し、有情群類を濟度し、長く宝祚を衛護す」。帝夢即ち醒め、因りて勅言有り。

これは万巻示寂の翌年の記事であるが、帝の夢に万巻が現れて、「我是室利応化」と述べているのである。「室利」は「文殊尸利」の略、つまり文殊の応化であると述べている。万巻が文殊「法体」神として符合し、箱根三所権現の一として神格化され祀られていたと考えられる。

また、箱根開山の神仙から万巻までの四世に関して、「則ち聖占・利行・玄利・万巻、各四輩は、真俗権実、あに大士変相に非ずや」とあり、「大士の変相」、つまり開山四代を仏の垂迹であると説明する。先にあつた「万巻＝文殊＝法体」という図式に組み込み、箱根三所権現の一として神格化されていた可能性を肯定する記述である。

そののちの記述には、空海の巡行や代々の帝の帰依を受けたこと、そして源頼朝の帰依を受けるようになったことを記す。このころの箱根権現の別当が第十九世行実である。

行実は『宮根山別当東福寺金剛王院累世』に「源頼朝公徒弟」とあり、また『吾妻鏡』によると、石橋山で大敗し、土肥の相山に逃れた源頼朝を匿った人物とされている。

また、行実と頼朝の関係を示す点として、別当第二十世の人物

の名前が注目できる。『吾妻鏡』において二十世の名は「永実」とされているが、『宮根山別当東福寺金剛王院累世』では「頼実」と記されている。この名前の変化について、本書は、「また頼朝行実有るを以て深期と為す。故に踵を頼実に読ましむ」や、注に「頼実、後永実に改む」などと説明している。『宮根山別当東福寺金剛王院累世』においても「源頼朝内縁亦猶子」とある。このことから『吾妻鏡』における「永実」は「頼実」としていると見てよいだろう。つまり、頼朝は行実を自身の「徒弟」とし、その故に行実の「踵（あと）」を自らの猶子とした証に名を「頼実」と改めさせたのである。

ここまでは箱根山開祖聖占仙人から十九世行実までの年代順に追ってきた。次に、本書に示される、箱根山各所の名称を整理したい。

まず本書では、主峰・駒ヶ岳について以下のように示している。

地神より以来漸く神徳を記し、天子公主略の祖宗を叙す。ここに人皇第五孝明天皇蓋代の初め、聖占仙人漸く駒形の権扉を排し、神仙宮を為す。人有て云うに、泰山府君秀峰を以つて座と為し、神仙世祿を長くかの岳に蔵し、因りて泰祿山と名づく。故に孝安天皇、寿をかの山に献ず、云云。

中国で古代から名山として知られる泰山に住し、人の生命や禍福をつかさどるとされる泰山府君に擬えて名付けたと記す。箱根における主峰が、泰山に匹敵する秀峰として説明している。

また、芦ノ湖周辺に関しても、以下のように説明する。

熟し四境は風致を觀じ、地は伊・駿・相三州を跨ぐ。因りてその域を分け、良材を波心に立て、号して目代木と名づく。

西汀は駿河津と名づく。南岸は伊豆地と号す。東浜は相模津と名づく。また云う、かの境をのぞむは業障懺悔、故に懺悔津と称す。

芦ノ湖が伊豆・駿河・相模の三国を跨ぎ、またその湖中には「目代木」と呼ばれる木材があるとす。これは、江戸時代の刊本「相州箱根山畧縁起」には「けけら木」と読むと記されており、当社社の伝説には、この木が、古来、伊豆・駿河・相模の界域を示したことから、平安・鎌倉時代、国守の代理となつて任国に赴いた役人の名称「目代」にちなんで名付けられたとされる。また、芦ノ湖の西・南・東のそれぞれの水際を駿河津・伊豆地・相模津と名付けられ、「相模津」と名付けられた東岸が、箱根権現の鎮座した場所となる。ここはまたの名を「懺悔津」と称された。これは、山岳僧たちがこの岸で水垢離をとり、業障懺悔の修業をしたことによる名称と考えられる。近世の史料になるが、「箱根山四十九院覚書」に「さんげの津」との記載がある。

また、駒ヶ岳以外の山については以下のように記す。

乾に焼契の大岡有り。人穢土を厭離し淨刹に現出せしむを欲するところの神通智力なり。左顧すれば富士峰巒有り。…(中略)…また良に峰有り。府君諸宝を収して、名を宝蔵岳と称す。左に並肩巒有り。長生妙術の靈葉これに籠めり。箱あり蓋あり。故に蓋子塚と号す。岸脚に二池有り。一は精進池と名づく。鱗魚これ衆類なり。一は那都奈池と名づく。…(中略)…また巽に山有り。悪鬼の毒風を降らすを欲す。因りて屏風岳と号す。左に嶠有りて室河津と名づく。弥勒尊仏淨刹の都率宮院に擬う。

「左顧すれば富士峰巒有り」との記載から、これは駒ヶ岳から見て乾(北西)に「焼契の大岡」があるとしているのが分かる。これは大涌谷の事で、かつては地獄谷・大地獄なども称した。高温の温泉とともに、硫化水素を含む有毒ガスや水蒸気も湧出するため、噴気地帯には植物が育たない無機質な殺伐とした風景となる。ほかに、「宝蔵岳」「精進池」「屏風岳」などの名称は現在と同じである。「蓋子塚」は現在の「二子山」であるが、その由来が一对の箱と蓋であると説明している。「那都奈池」は二子山の南麓の池であり、現在は「お玉が池」と称される。「精進池」は近世資料に「生死の池」、「生志池」などと記される。精進池湖畔は国史跡、重要文化財に指定されている元箱根石仏群が点在し、箱根山における儀礼空間の痕跡が残されているが、これに相応しい名称で呼ばれていたことが窺える。

最後に、本書に記される高僧の来訪譚について。本書には役小角・玄昉・吉備真備・行基・空海・円仁が箱根に来訪したと記される。この記述はもちろん史実として受け止めるのではなく、箱根の靈験を高めるために語られたと考えるのが妥当であるし、本書の執筆意図も、権現の来歴を説明するとともに、箱根の神々の靈験あらたかな様子を知らしめることを目的としているだろう。役小角や玄昉、吉備真備などは奇怪な伝説や伝承が多い人物であるし、行基や空海は全国に開湯伝説のある僧であることから、箱根も歴史を語る上で取り入れてきたのだろう。特に空海が発見したとする温泉の伝説は全国にあるが、伊豆山温水もその一つである。役小角と空海は『走湯山縁起』に登場している。箱根山と伊豆山の縁起の構造は、先に述べたとおり共通している。伊豆と箱

根は二所権現として一つの信仰空間として発展し、鎌倉幕府の「二所詣」であり、『神道集』をはじめとする「二所権現」説話が「そもそも箱根と伊豆は姉妹関係にある」とする根拠ともなっているのである。本書と『走湯山縁起』を比較することで、両山が同様の起源譚を持つこと、そして高僧の来訪譚によってその神威を高めているという点が共通であることが分かるのである。

以上のように、本書に記載された内容を確認すると、箱根山の開祖聖占上人から十九世行実までを年代順に示し、それぞれの時代に箱根権現の信仰空間がいかにして発展したかということが記されているのである。仙人たちから万巻上人までの時代に、神々の箱根への来臨と垂迹の経緯を語り、それ以降靈驗ある靈山の姿を様々な高僧たちの来訪譚によって示す。しかもこの縁起語りの問題は箱根山のみならず、必ず伊豆山の信仰体系と連動しているという点も重要である。さらに箱根と伊豆の二所の靈山が、源頼朝による鎌倉幕府の信仰を受ける権現であると我々読者に示しているのである。

四、「筥根山神道口訣」の存在

「筥根山神道口訣」は、箱根神社に所蔵される『筥根山縁起并序』のa本（白文）の末尾、終わりの二紙に渡って記されている。この内容は、『筥根山縁起并序』と、全く別個の「箱根権現縁起」を語るものである。

そもそも「口訣」とは、秘伝の内容を文書に記さずに、口承で直接言い伝えるものである。つまり、本書は冒頭で示されたとお

り、箱根の地に神が降臨したことから始まる箱根権現の由来を、「口伝の書」として編纂したテキストである。そして、この「口訣」としての性格が、神社所蔵の『筥根山縁起并序』のみに付されていて、他の写本に残されていないことへの理由になる。口伝で伝えられていた「口訣」は当社でのみ受け継がれ、門外不出とされていたのである。

では、内容に関してはどうか。以下に挙げるのが「筥根山神道口訣」の全文である。（私意で書き下し、句読点を付した。）

伊弉諾、伊弉冉尊、下界を管さどらんことを欲し、先ず当神名を白和龍王と号す。篋、蓋しかのみならず。一滴水。左鵲王、右鵲王、両翼を挟み、当境に降る。同じく二十九石を抛げ、左右の亭路に配し、二十八里と為す。而して妙法二十八品に擬す。また二石有り。額に号して護獄王門の四字有り。故に四の鳥居有り。東西南北の四門に準ずるのみ。

一番、馬降石、発心門と号す。

二番、馬乗石なり。或いは問いて曰はく、「洪流を渡らざして長橋有り如何」。答へて云ふに、「有為の域を越へ、無為の宝処に届く。生死愛河に絶し、即ち涅槃の岸に至る。故に五十二位を表し、五十二間の板橋有り」。

三番、大堂の前に、釈氏説法の会処有り。鹿野苑と号す。故に麋鹿常に群集す。

また周穆王、八疋の駒に乗り、靈山会上に詣つ。それより以来、八駿駒その形を分け、当社駒形と号す。また真龍の種、今に四山に遺すのみ。

四番、新宮より本宮に至り、迹門より本門へ至る。権を以つて実と為す。古釈有り。地位漸階を削り、等妙頓至を開く。故に当山に詣づる輩、未だ惑いを断たざる凡夫、直ちにあに仏果に至らざらんや。

まず本書は、伊弉諾・伊弉冉尊が「白和龍王・左鵠王・右鵠王」と共に箱根に降臨するという書き出しから始まり、箱根の靈地を一番から四番までの四門に準じ、それぞれの由来を説明するという形をとる。

一番、二番とされる「馬降石」「馬乗石」は、駒ヶ岳山頂にある箱根神社元宮にある神岩である。神々が箱根に降臨する際、白馬に乗って「馬降石」「馬乗石」に降り立ったという伝承が残されており、箱根を語る物語の冒頭としてふさわしい存在である。

また、「一番、馬降石」は「発心門」とされており、これは山岳信仰における四門修行に由来している。山上の聖地に至る間に発心・修行・等覚・妙覚の四つの門を設け、それらを通り抜けることによって悟りが開かれるという考えであり、いわば「発心門」は聖域への入り口を示している。熊野には九十九王子のはじめとして「発心門王子」があり、箱根の靈地形成に、熊野権現の信仰形態が影響していると考えられる。次の「三番大堂」、つまり権現の境内は、釈迦が成道ののち初めて説法した鹿野苑に擬されている。また、穆王が靈鷲山に至り、釈迦の説法を聴聞したという故事に擬えて、当社を駒形と号した由来と説明する。

このように、「筥根山神道口訣」は箱根権現についての由来を説明するという性格を持つということが分かる。しかし、箱根という靈地は、『筥根山縁起并序』において神仙の降臨によって開

かれた場所と説明されていたのに対し、本話は伊弉諾・伊弉冉尊の降臨譚から開始しており、他の（A系統）に属する縁起・略縁起のみならず、（B系統）にも含まれない、全く独自の言説を有しているのである。これは本書が「口訣」、つまり口頭でのみ伝承される箱根権現の秘儀であったという性格があるためである。

『筥根山縁起并序』は、歴代別当や天皇の時代ごとに歴史を叙述することで、権現の由来や靈験を示してきたが、これとは全く別の箱根権現の縁起が秘儀として伝えられて来たのである。本来であれば文章にされるべきでは無いのだが、師から弟子へ伝授される過程で記録されたのであろう。その代り、神社蔵本以外の諸本に記載されていないことから、この内容が箱根権現の外部には秘匿されていたと推測できるのである。

しかし、この二種の縁起を、単純に別個の縁起として考えるのではなく相補する形で解釈することはできないだろうか。

『筥根山縁起并序』が示したかったことは、箱根開山の祖やここに巡礼した高僧の事跡、鎌倉幕府を開いた源頼朝の事跡などを通じて繰り返して訴えられてきた、靈験ある箱根権現の姿である。

神功皇后と武内大臣による権現創設や、役小角・吉備大臣・玄昉・空海・円仁など著名人の巡礼を列挙する点に、その姿勢が窺える。

「筥根山神道口訣」の内容は、まず箱根という靈地の様子を詳細に描き出そうとする姿勢が見出せる。そして権現の地理が示されることによって、参詣者が巡礼する際に必要な権現に関する知識や、巡礼経路が説明されていると考えられるのではないか。現在に残る箱根修験の順路は、万巻上人廟参拝―精進池―死出山―提灯山―本宮山―駒ヶ岳、というものが通例とされている。この

順路は本書の示す巡礼経路に当てはまらないため、時代と共に変遷した可能性があるが、管見の限り詳細は未詳である。

しかし、このような修験者の山入りルートが設定され、整備されているという点はやはり注目されるべきである。つまり本書には、正しく箱根権現を巡礼させるための指南書のような性格が備わっているのではないか。本文中には「問いて曰はく」「答へて云ふに」のような問答形式になっている箇所があり、師が弟子へ秘儀を伝授する姿を想起させる。権現は妙法二十八品（『法華経』）に擬えられて、「四番、新宮より本宮に至り、迹門より本門へ至る」という文言も、『法華経』の前半四巻を迹門、後半四巻を本門とする考えに基づいている。つまり、箱根権現境内の新宮から本宮に至るまでの道のりを、迹門から本門という成道に近づく過程として示しているのである。

また「発心門」とあるように、箱根も熊野と同様の四門修行の場でもある。凡夫は当山を巡礼することにより、やがて悟りの境地に導かれることを約束されるわけである。二所権現の一方である走湯山にも、同様な形態を持つ『走湯山秘決』²³が存在する。内容はやはり『走湯山縁起』とは別系統の、走湯権現の由来を示す「口伝の書」である。

この『走湯山秘決』には走湯権現の境内図が付されていて、霊地めぐりの作法を教授する意図がより一層明らかになっている。ここから考えると「筥根山神道口訣」にも同様の境内図が付されていたが、現在は欠脱した可能性が考えられる。また、本文に関連しても内容の理解に困難な箇所がある。例えば「筐、蓋しかのみならず。一滴水」とある部分は、明らかに意味が通じないため、

口伝を省略したものと考えるのが妥当であろう。残念ながら、現在のところ『筥根山縁起并序』の神社蔵本aのみに記される内容であるため、確認する手立てがない状態である。

以上のように、『筥根山縁起并序』と『筥根山神道口訣』は一見すると別個の縁起であるように見える。しかし、『筥根山縁起并序』によって権現の霊験を知った参詣者が、実際に巡礼する際には「筥根山神道口訣」を先達から伝えられなければならないというような形式で、お互いが補い合う形をとって、実は密接な関係を有し、一組のテキストとして成り立っていると考えられるのである。

五、おわりに

以上、「箱根権現縁起」を研究する一環として、『筥根山縁起并序』に焦点を当てて論じた。箱根権現に関する研究は主に〈B系統〉で進んでおり、本書は箱根権現の根本縁起としての性格を有しながらも、その内容がほとんど知られていない状況であった。箱根の信仰形態、歴史的背景を理解する為に重要な存在であり、多く取り上げられるべきテキストである。

「筥根山神道口訣」は『筥根山縁起并序』や〈B系統〉の諸本とも全く異なる言説を有し、重要な存在である。今回は簡捷な検討のみとなってしまうが、今後はより深い考察が必要である。例えば修験道の観点から考えると、箱根と熊野修験の関連性が指摘できる。巡礼のルートや箱根における講の存在など、中央（熊野）と地方（箱根）という比較検討が必要であろう。

また、走湯山縁起との関連も無視できない。伊豆と箱根は二所詣の地として一対であり、神仙による開山、温泉を湧出する霊地などの共通点がある。そして〔B系統〕では、二つの聖地が一つの物語の中に組み込まれ、発展を遂げる。箱根権現、伊豆権現とを、より重ねて読んでいく必要があると思われる。

【使用テキスト・図録】

■テキスト

箱根神社社務所編『箱根神社大系 上(下) (復刻版)』(名著出版、一九八〇年、*一九三〇年(昭和五)に刊行されたものの復刻版)

岡見正雄・高橋喜一校注『神道集』(『神道大系』文学編一、神道大系編纂会、一九八八年)

■図録

児玉幸多監修『東海道分間延絵図』第四卷「箱根 箱根権現」(東京美術、一九七九年)

箱根神社「箱根神社―信仰の歴史と文化―」(箱根神社、一九八九年)

小松茂美・松原茂・島谷弘幸『箱根権現縁起誉田宗廟縁起』(『続々

日本絵巻大成 伝記・縁起編七』中央公論社、一九九五年)

箱根神社「箱根の宝物」(二〇〇六年)

箱根神社「特別展 二所詣―伊豆箱根二所権現の世界」(二〇〇七年)

注

(1) 西田長男「宮根山縁起并序」(『群書解題 第六卷 神祇部』統群書類従完成会、一九六二年)、同「僧満願の神宮寺創立」(『神道宗教』二七、一九六二年)がある。特に、「群書解題」において、(1)箱根権現の縁起を記した内容であること、(2)成立年代は鎌倉時代初期まで遡り得ること、(3)奥書の内容から別当行実の請によって信救(大夫房覚明)が著した、などの基本的情報が初めて整理された。

(2) 五来重「箱根山修験の二種の縁起について―『宮根山縁起并序』と『宮根権現縁起絵巻』」(『山岳宗教史研究叢書』一四、一九八〇年)

(3) 執筆者：大夫房覚明に関しては、根井浄「大夫坊覚明と「平家物語」」(『印度学仏教学研究』三一、一九八三年)、佐々木紀一「矢田判官代在名・大夫房覚明前歴」(『米沢史学』一七二〇〇一年)に詳しい。現在は、これらの研究により『宮根山縁起并序』の執筆者として覚明を仮託していると結論付けている。

(4) 箱根神社社務所編『箱根神社大系 上(下) (復刻版)』(名著出版、一九八〇年)の書誌による。

(5) 澤井英樹「異域の神人―走湯権現の造形をめぐって」(『春秋』三〇八、一九八九年)、同「異域の神人と龍神―走湯山縁起の世界(1)」(『神語り研究』三、一九八九年)、同「行者・巫女・氏人―走湯山縁起の世界(2)」(『神語り研究』四、一九九四年)、鴨志田(阿部)美香「走湯山の縁起―異域の神人」走湯権現と「根本地主」白道明神・早追権現をめ

くって」〔「解釈と鑑賞」六三―一二、一九九八年〕、同「走湯山縁起」について その価値の再検討」〔昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要〕七、一九九八年、同「走湯山縁起の表現と世界像―『走湯山縁起』『走湯山秘決』を中心に」〔「説話文学研究」三四、一九九九年〕、菊地晋介「走湯山縁起」諸本の研究（神道宗教学会 第五七回学術大会紀要号―研究発表第一部会）〔「神道宗教」一九四、二〇〇四年〕など。

(6) 『走湯山縁起』巻一による。応神天皇二年、神奈川県大磯に光明・音曲を放つ円鏡（湯神）が出現したこと、それを祀った人物が、開山祖師、勧請上人と言われる松葉上人である、という内容である。

(7) 西田長男「僧満願の神宮寺創立」〔「神道宗教」二七、一九六二年〕の研究による。

(8) 天保十二年（一八四一）成立、全一二六巻。『大日本地誌大系』収録。

(9) 大磯町高麗山に南麓に鎮座。『筥根山縁起并序』には、神功皇后の時代に「高麗大神和光」が大磯の峰に渡来したとの記載がある。

(10) 『神道集』巻二―七「二所権現事」の記載に「能善権現、守護の山神、…吉祥駒形は、太郎の王子の兵士なり。」とある。

(11) 注（2）参照。

(12) 注（4）所収。

(13) 治承四年（一一八〇）八月二十四日条。

(14) 注（4）所収。

(15) 『片玉集』巻之九七所収。

(16) 元禄年中に、関所破りに失敗し処刑された「お玉」の伝説が由来とされる。『新編相模国風土記稿』（天保十二年（一八四一）に「那津那池」、『箱根神社大系（下巻）』所収の地図には「薺池」と記載されており、どの時期から「お玉が池」という名称が通例となったかは未詳。

(17) 児玉幸多監修『東海道分間延絵図』第四巻「箱根 箱根権現」（東京美術、一九七九年）

(18) 『箱根湯治場道見取絵図控』（通信総合博物館所蔵）による。柘植信行「箱根七湯の道―通信総合博物館所蔵『箱根湯治場道見取絵図控』を中心に―」（日本温泉文化研究会「温泉の原風景」（岩田書院、二〇一三年）に詳しい。

(19) 現在「白龍神社」として九頭龍神社本宮近くの湖岸の森に鎮座する。『新編相模国風土記稿』には箱根権現の末社に「白鳥」、「左鶴王」、「右鶴王」が列せられている。

(20) 注（4）所収。

(21) 『太平記』巻一三「龍馬進奏の事」など。

(22) 箱根神社「箱根神社―信仰の歴史と文化―」（箱根神社、一九八九年）による。

(23) 『走湯山秘訣』に関しては、阿部美香「走湯山縁起の表現と世界像―『走湯山縁起』『走湯山秘決』を中心に」〔「説話文学研究」三四、一九九九年〕、同「翻刻紹介『走湯山秘訣』前田育徳会尊経文庫蔵本」〔昭和女子大学女性文化研究所紀要』三六、二〇〇九年）による。

(24)

巫女・初木が月光童子に出会い問答を交わして、走湯権現の謂れを知り、やがて月光童子に導かれ、日精・月精とともに走湯山の地下にある浄土に入り、俗体・女体神であり赤白二龍でもある、本地を千手観音とする僧と権現の姿を見る、という浄土めぐりの物語。

(おおくはあづみ 本学前期過程修了生)